

東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2020

「考えて生きる ～大学は知の宝庫～」

第7回 12/18 (金) 13:30～15:00 報告

ベートーヴェンの音楽の新しさを考える ～大学は知の宝庫～

講師 菅野道雄 (本学教授)

於：図書館大セミナー室

◆◆◆◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*

令和2年度第7回公開講座(受講者36名)が12月18日に開催されました。菅野先生は今年度のシリーズのテーマである「〇〇を考える」ことをクラシック音楽の観点から見ることにしました。

今年はベートーヴェンの生誕250周年に当たる年です。コロナ禍の中で、本来の世界中で実施するはずだったベートーヴェン作品の演奏会などができなくなりました。しかし、本講座では短い時間でベートーヴェンの作風の斬新さを考えさせる作品を2つ鑑賞しました。

西洋の音楽史の中で、ベートーヴェンほど有名な作家はいません。その知名度は現在だけでなく、活躍しているときも非常に高かったです。ベートーヴェンのお父さんはモーツァルト同様に非常に若いころから音楽界に出しましたが、彼は自分の表現を見つけ、独創的なスタイルで作曲をしました。

今日は最初にベートーヴェンの1808年から1811年の作品、ゲーテの戯曲「アテネの廃墟」のための音楽から「トルコ行進曲」を鑑賞しました。トルコ風の芸術は流行っていましたが、ベートーヴェンは従来の貴族向けのかしこまった作風をさけて、感情表現を重視した作品に仕上げました。

ベートーヴェンの貴族や上流社会に対する考え方の表れとして、ゲーテと出会ったときの話が紹介されました。お散歩中に向こうから歩いてくる貴族の集団に対して、ゲーテは立ち止まり、帽子を脱ぎお辞儀しましたが、ベートーヴェンは変わらずに歩き続けて、貴族が自分に向けるお辞儀を当たり前のように受け止めました。「ゲーテよ、偉大な作家であるあなたはなぜあんなくだらない人たちに頭を下げるのか？」と失望したように聞きました。ベートーヴェンにとって、人の価値は生まれと身分ではなく、感性と思考力にあったと思われまます。

二つ目に鑑賞した曲は「交響曲第7番イ長調作品92」でした。「第5(運命)」などではトロンボーンなど、交響曲にめったに使われていない珍しい楽器を導入して、新鮮な音色を生かしていましたが、この曲では伝統的な編成に戻っています。しかし、曲の構成は斬新で、同時代の作曲家ヴェーバーは「ついにベートーヴェンも狂ったか」とつぶやいたそうです。それでも、聞いた人の間で評判は良く、高く評価されました。菅野先生は第7が「ベートーヴェンの9つの交響曲の中でも、最もポップでロックな作品ではないかなと思うのです」と話しました。

ベートーヴェンの新しさを十分に考えさせられる講座でした。

【講座の様子】

